

恩師、安積桑野七十五期、主な同窓生へ発行部数三百部、老後の生き方を真剣に問いかける豆新聞。

七十五期 葉書の豆新聞

▼奥谷芳子||吉井省吾未亡人から未使用ハガキ届いた。葉書をあげがとうございましたではそつけない。しばらく振りで豆新聞を出して感謝としよう。▼しかし老齡化と共にあまりニュースも集まらない、そうだ豆新聞の書式を替えて文字を大きく、ネタを少なくなら何とか埋まる。と言う事で文字を大きくシニア向けとなった。▼奥谷夫人の手紙には夫の死

後二十四年経った。七〇才から年に一度、大河原浩気、鎌田真胤、永山洋三、伊藤正等昔の吉井の友人と会うとの事。ちなみに亡くなった同期生の夫人にはこの豆新聞九人に送付▼佐々木寛侑はこの五月末の議員総会で郡山商工会議所の専務理事を退任する。昭和六十年五月に常務理事から足掛け三十二年の勤務であった。▼私の記憶では大震災のさなかに彼は脳梗塞発症で病院のベッドの上だった気がするのだが。丹治一郎会頭のもと全壊した商工会館を郡山市の施設に仮移転運営、

新商工会館を落成、滝田康雄新会頭七六期の代替わりを見届けての退任となる。リハビリもそこそこの退院だったため脚に不自由が残る。▼昨年福島県県外在住功労者表彰を受けた伊藤庄平元労働事務次官は春の叙勲で瑞宝重光章を受章した。蛇足ながらインターネット辞典ウィキペディアには原正夫、伊藤庄平が載っている。▼昔、古川清東京桑野会会長から勧められた朝河貫一著の『日本 の禍機』は日本語なのに浅学で理解不能。いよいよ樽井保夫七十七期の現代語訳で発刊となる。